

オーウェン共同体と世俗的千年王国

吉 村 正 和

20世紀初頭におけるエベニーザー・ハーワードのレッチワース田園都市運動は、単なる経済原理に基づく社会主義思想から始まったものではなく、19世紀後半からヨーロッパを席卷した心霊主義と神智学の影響のもとに展開したものである。ハーワードの田園都市の源流ともいえるのは、その100年ほど前の19世紀初頭にニューラナーク紡績工場の経営を通して新しい共同体を構想したロバート・オーウェンである。本稿では、オーウェン共同体の理念がハーワードと同じように、あるいはそれ以上に、千年王国思想や心霊主義に並行する試みであったことを考察することにより、イギリス社会主義運動の根底には特殊な宗教的メカニズムが機能していたことを検証する。アメリカのシェーカー共同体など数多くの共同体がいわば宗教的千年王国を目指したのに対して、オーウェンのニューハーモニーにおける実験は世俗的千年王国を標榜していたことに注目し、両者の比較を通してオーウェン共同体の意義についても考察する。

オーウェンの場合には、産業革命の進展にともなって深刻さの度合いを増した貧困労働者の雇用と救済手段を模索する過程から「一致と協同の村」(villages of unity and mutual co-operation)の発想が生まれてきた。オーウェン自身は熱心なキリスト教徒ではなかったが、オーウェンの共同体主義を支えている理念は、「千年王国」と「新しいイエルサレム」というキリスト教的な観念である。それは新約聖書の「ヨハネの黙示録」に登場する観念であり、歴史の終末に約束される理想的共同体あるいは理想都市である。オーウェンはニューラナーク紡績工場での経験を基にして「一致と協同の村」を構想するが、1816年の『ニューラナークの住民への演説』(*Address Delivered to the Inhabitants of New Lanark*)が明確に示しているように、そのもっとも重要な内的な裏付けとなったのは千年王国を世俗化するというレトリックである。

1820年の『ラナーク州への報告』(*Report to the County of Lanark*)で提示されている理想共同体はアメリカ合衆国のインディアナ州ニューハーモニーにおいて実施されるが、オーウェンの期待に反して数年で失敗し撤退する。共同体が維持されるためには、共同体を結束させる結合原理が重要となる。同時代の代表的な宗教共同体といえるシェーカー共同体が数十年にわたって存続することができたという事実と比較すると、オーウェン共同体が短期間に解体した理由が重要な意味をもつことになる。

オーウェンが合理宗教を標榜する一方において、晩年ではあるが心霊主義に傾倒して

いたという事実はよく知られている。通常のオーウェン研究においては、心霊主義は老齢のために思考力が弱ったオーウェンが手を染めた余技のようなものと捉えられている場合が多い。加えて、心霊主義は、彼が目指した合理宗教とは矛盾する思考法に基づくものという見方も根強くある。しかし、千年王国を世俗化することにより理想共同体を建設しようとするオーウェンの内的世界において、心霊主義は合理宗教と矛盾することなく接合されており、この傾向はオーウェン以降も、イギリス社会主義の深層として20世紀初頭まで持続するのである。

1

オーウェンの生涯においてニューラナーク時代はもっとも充実した時代であり、思想的にもその頂点を極めた時期である。最晩年に執筆された『自叙伝』もニューラナーク時代がクライマックスになるように構成されており、ニューラナークこそオーウェンの原点であると認識していたことを示している。

ニューラナーク時代は、創業者デイヴィッド・デイルの長女キャロラインと結婚してニューラナーク紡績工場の経営を開始した1800年1月1日からアメリカ合衆国においてニューハーモニー共同体を運営するためにイギリスを離れた1824年10月2日までのおよそ25年間と考えてよいであろう。ニューラナーク以前の時代はオーウェンが自らの世界観を確立するための準備期間、ニューラナーク以後の時代はそこで実践した思想を応用して広く新しい世界に普及させようとした期間と位置付けることができる。

ニューラナーク時代はさらに、1814年1月1日より以前と以後の2つの時代に分けることができる。1814年を境にオーウェンは思うがままに自分の思想をニューラナークにおいて実践することができるようになる。1814年から1820年までの6年間はニューラナーク時代だけではなくオーウェンの生涯の絶頂期である。1814年には事実上の単独経営が始まっただけではなく、主著『新社会観』(*A New View of Society: or Essays on the Principle of the Formation of the Human Character, and the Application of the Principle to Practice*)がこの頃に刊行され、1816年には性格形成学院 (*Institution for the Formation of Character*) が完成する。1817年にはロンドン・タヴァーンにおける2回の講演が行われる。とくに1817年8月21日の講演は重要であり、オーウェンは「生涯でもっとも重要な日」と断言している。¹ 1820年には理想共同体の構造を明確にした『ラナーク州への報告』が完成する。

1800年からオーウェンはニューラナーク紡績工場の経営責任者として運営にあたったが、工場は単独所有ではなく共同所有であった。いうまでもなく私企業としてニューラナーク紡績工場の第一の目的は利潤の追求であり、オーウェンもそのことは認めていた。オーウェンの労働改革はそのことを認めたくえでの冷徹な改革であり、経営者とし

での労働者側への大幅な譲歩という意識はオーウェン自身にもなかった。労働者はオーウェンによって「生きた機械」(vital machines)と表現され、労働管理の手法として導入された「沈黙の監視」(silent monitor)も労働者自身の内的規制による管理という思想から生まれている。性格形成というオーウェンの教育理念も、現状の社会システムを維持しながら改善していくという前提で実践されたのである。しかし、そうした姿勢を考慮しても、オーウェンが利潤追求以外の分野にエネルギーを費やしていることは、工場の共同経営者には不愉快なことに思われた。

1813年6月30日までにオーウェンと共同経営者との亀裂は決定的になっていた。オーウェンは『新社会観』の一部となる第一論文を書き上げて新出資者を探し始める。新出資者としてクエーカー教徒のジョン・ウォーカー、ジョゼフ・フォックス、ジョゼフ・フォスター、ウィリアム・アレンのほかマイケル・ギブズ、功利主義哲学者ジェレミー・ベンサムなどが参加する。1813年12月31日にグラスゴーで行われた競売において、旧共同経営者の思惑を退けてオーウェンは、114,000ポンドでニューラナーク紡績工場を落札する。

勝利をおさめたオーウェン一行がニューラナークに戻ると、ラナークの人々は大歓迎で迎える。1814年1月10日の『グラスゴー・ヘラルド』紙によると、オーウェン一行がラナークの町に入る時ほとんどすべての住民が出迎え、「現地のフリーメイソンが旗や鳴り物入りで」その先頭に立ったという。歓迎の人々はラナークからオーウェンの家族が住んでいたブラックスフィールドまで同行し、さらにニューラナークの通りをねり歩く。ニューラナークの中央に位置するオーウェン邸に着いてオーウェンが挨拶すると、人々が熱狂してこれに応えた。「オーウェン氏はニューラナークのすべての住民と近隣のすべての階層の人々に愛されており、彼が今後も工場の所有者であり続けるというニュースを聞いて以来、当地は幸福感がみなぎっていた」。²

こうしてニューラナークの事実上の単独経営に乗り出したオーウェンが、まず実現を目指したのは念願の教育施設の建設である。ニューラナークの住民のコミュニティーライフの要となるように、ニューラナークの中心に建てられたこの施設は性格形成学院と名づけられ、1816年1月1日に開校式が行われる。オーウェンは当日、集まった1,200人ほどの村人や来客を前にして長い講演をする。あまりに長いので途中休憩が入り、音楽が奏されたほどである。『ニューラナークの住民への演説』といわれるこの講演からは、オーウェンの心がたんに社会改革だけに向かっているのではなく、独自の新しい<宗教>ともいえる運動を開始しようとしていたことが窺われる。そのさいのキーワードは、<千年王国>である。オーウェンはこの講演によって、いわば世俗的千年王国の開始を宣言したのである。

オーウェンはまず性格形成学院の設立について、その目的がニューラナークの住民の

幸福と利益にあること、さらに近隣住民の幸福、大英帝国の改善、人類全体の改善と救済も視野に入っていると説明する。オーウェンは自分の経験に基づいて、現在の悲惨な状況の原因が「無知」と「誤謬」にあり、それを克服するためには友愛に基づく「知識」が必要であると主張する。「無知」と「誤謬」はキリスト教における原罪のようにあまねく人類に浸透しており、この害悪を免れている人はひとりとしていない。オーウェンのいう「知識」に従って人々は「生まれかわる」必要があり、その結果として、すべての人に「幸福」が約束される。

性格形成学院の開設の目的は、まずニューラナークの住民全体の性格を形成することから始め、さらに進んで「無知」と「誤謬」から人類を解放し、すべての人に「幸福」を享受させることにある。「性格」(character)とは、『オックスフォード英語辞典』の定義するように、「個人あるいは民族を特徴づける道徳的・精神的な性質の総体」であり、「自然と習慣によって個人あるいは国民に刻印される個性」である。主として個人の感情や意志などの傾向を指示する日本語の意味内容とは異なり、そこには共同体全体の道徳的品格という意味が含まれている。

オーウェンはニューラナークにおけるこれまでの歩みを振り返り、まず創業者の功績を称えたのち、貧困・犯罪・悲惨に満ちていたニューラナークがオーウェン自身の努力によっていかに改善されたかを力説する。過失を犯した人を罰するという通常的手法ではなく、「無知」という根本原因を除去することによって、虚偽・盗み・泥酔・不正を行おうとする心は自然に人々から消えていくというのである。こうして「新しい時代が始まる」とオーウェンは宣言する。その新しい時代は、無知から開放されて、友愛・善意・平和に関する知識を実践することで始まる。この発想は、啓蒙主義の延長上にあると見てよいであろう。無知から知識への展開は、迷信から理性を目覚めさせようとする啓蒙主義の主張そのものである。誤謬に被われていることに気がつけば人間は自ずから「知識」に導かれるというプロセスを、オーウェンは「眼隠しを取り外す」過程として叙述する。啓蒙の光から遮断されて暗黒の世界をさまよう人々の状況を説明するために、「眼隠しの布」(band, bandage)というお気に入りの比喩が数回にわたって使用される。³「眼隠しの布」が啓蒙主義と歩調を合わせて展開したフリーメイソンの参入儀礼で使用される小道具であること想起すると興味深い。

オーウェンのレトリックの特徴は、この啓蒙主義に千年王国の言説を重ねている点にある。無知は、「人々のあいだに憎悪と不和の種」を蒔いて、人類を欺いてきた「悪霊」(the evil spirit)であると断罪される。伝統的な千年王国思想では、まず悪を析出してそれを対象化し、さらにそれを悪魔(悪霊)と同定することにより、神と悪霊との最終戦争が開始される。オーウェンの講演は、この千年王国の到来を模索する熱狂者の口調に近づいていく。「簡単にいうと、こうした大いなる誤謬が取り去られるとき、われわ

れのすべての悪しき情熱が消え去り、人の人に対する怒りと不快の根柢がなくなるのです。その時こそいわゆる千年王国が始まり、普遍の愛がゆきわたるのです」。永遠の平和が到来し、すべての人が幸福を享受する時代が来る。オーウェンは、千年王国に言及して、さらに次のように続ける。「皆さんがそれぞれ千年王国という言葉にどのような意味を込めておられるか私には分かりません。私に分かるのは、千年王国と呼びうる社会では犯罪や貧困は見られず、人々の健康は大いに改善され、悲惨についてはあったとしてもほんの少しの悲惨しかなく、英知と幸福が満ちあふれているということです」⁴ この著名な部分には、オーウェンの主張する世俗的千年王国とは何かが簡潔に表現されている。オーウェンの考える千年王国とは、共同体全体の性格が形成され、自由と幸福の実現した現実社会にほかならない。それまでの千年王国主義がいかに完全な理想社会であることを約束しても、実現された社会が犯罪や貧困、不健康や悲惨の残る社会であるとすれば、それは千年王国と呼ぶことはできないというのである。

オーウェンは千年王国というキリスト教の宗教的観念をいわば換骨奪胎して読み替えている。千年王国は遠い未来の彼方において、超越的な神の介入によって到来するものではない。それは、今、ここ（すなわち、現在、この場所において）、人間の手によって実現されるものである。オーウェンにとって〈千年王国〉とは、個人主義と対立する社会主義的な理念が住民の健康を保証し、性格形成論が住民の幸福を保証する現実の共同体にほかならない。

2

オーウェンは、これまでの社会制度は個人にすべての道徳的な責任を押し付けてきたとして批判したうえで、集団（共同体、社会）の改善こそ個人の性格形成にもっとも重要な役割を果たすと主張する。自由主義と個人主義に基づいて大英帝国の繁栄を築きあげつつあった時代において、利己主義と物質主義が極端に肥大化してさまざまな社会矛盾が生まれることは避けて通ることができなかった。中産階級が富と権力を掌握する市民社会において、社会矛盾は貧困労働者が引き受ける仕組みになっていたのである。こうした時代にあってオーウェンは、共同体建設こそそのような矛盾を解決する唯一の手法であるという結論に達する。

オーウェンの自信を裏付けていたのは、ニューラナークの実験とその成功である。オーウェンの改革は、制度的な改革と個人の道徳的な改善がゆっくりと漸進的に進められていくことを想定しており、フランス革命あるいはイルミナティ（Illuminati）のような急激な社会変動をとともなう手段によっては真の改革は行われぬという立場である。⁵ 革命は、結局「憎悪と復讐」の感情を引き出して、新たな闘争を用意するだけである。オーウェンは、慈愛と親切の心情こそが真の幸福の浸透する時代を導くものであり、

「完全な社会」すなわち「千年王国」を到来させる鍵は教育にあると考えるのである。

『ニューラナークの住民への演説』が行われた翌1817年には、ロンドン・タヴァーンにおける2回の講演が行われる。とくに1817年8月21日の講演は重要であり、すでに指摘したように、オーウェンは「生涯でもっとも重要な日」と断言している。オーウェンの『自叙伝』は最晩年に執筆されていながら、その記述はニューラナーク時代で終わっているだけでなく、そのクライマックスは1817年8月21日の講演にあるかのように構成されている。オーウェンは、自分の生涯の意義をこの講演に凝縮させている。

オーウェンの『自叙伝』の第9章は、1817年における2回の講演の様子を詳しく語っている。8月19日にリヴァプール卿に面会し、新社会を到来させるためには現存のすべての宗教を「誤謬」の根源として否定しなければならないこと、また「宇宙の偉大な創造的力」(the Great Creating Power of the Universe)⁶に基づく新社会観がそれにとって代わる必要があることを説明する。21日の講演は歴史において「永久に記憶されるべき」重要な出来事であり、「世界の全宗教を否定し、廃棄する」という使命を「生命を賭して」実践するという悲壮な決意を示したあと、次のように述べる。「ここにいる犠牲者を見よ。今日、この時、まさに今、こうした束縛はこなごなに砕かれて、この世の続くかぎり元には戻らないでしょう」。⁷「犠牲者」とはオーウェン自身である。この時点においてオーウェンは、ほとんど預言者のような位置に自分をおいている。オーウェンは、既成のすべての宗教を社会的な悲惨・対立・無知そして誤謬の原因として廃棄し、新しい宗教(「合理宗教」)を導入しようとする。新しい宗教の「救い主」はオーウェン自身である。オーウェンは8月21日の講演内容の一部をそのまま『自叙伝』に採録しており、彼がこの瞬間こそ生涯のクライマックスであると認識していたことを示している。⁸

1817年9月10日の新聞紙上に掲載されたオーウェンの書簡は、彼の千年王国の実態がキリスト教の観念を倒立させたものであることを物語っている。オーウェンは、「ルカによる福音書」(21:25-28)における次のような終末の場面を引用する。「それから、太陽と月と星に徴が現れる。…人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを人々は見ると。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時は近いからだ」。オーウェンはこの引用部分について、「人の子」を「真理」と読み替え、「解放」を「犯罪と悲惨からの解放」と読み替えている。⁹オーウェンにとってキリストの再臨とは、人間の性格形成と社会に関する真理が浸透することにより誤謬に満ちた旧制度が壊滅して、犯罪と悲惨から人類が解放される瞬間を意味しているのである。

3

オーウェンの理想共同体は「空想」的なものではなく、自らの経験に裏打ちされていた。1815年には戦争が終わり、その反動で大不況がイギリスを襲うと、失業した大量の貧困者のための対策を立てることが急務となる。1817年にオーウェンは『貧民労働者救済委員会への報告』(Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor)を提出し、その解決策を示している。このプランは当初、貧困労働者に生活の手段と場所を提供するという目的をもって始められた。その後オーウェンは、このプランを国家的な規模で展開することにより、人類を解放して新時代を到来させる、すなわち千年王国を実現する具体的な手段と認識ようになる。「一致と協同の村」というオーウェンの共同体は、500人から1,500人程度の規模が適切であり、住民は農業に従事して自給自足の生活を支えると同時に工業の生産活動にも参加する。村の中核となるのは四角形の建物(オーウェン共同体の象徴)であり、そこでは約1,200人が協同で生活をする。建物の周囲に1,000~1,500エーカーの土地があり、敷地の中央には共同調理室と共同食堂などの公共建物がおかれる。幼児教育の学校、講義室と礼拝堂、年長児童教育の学校、図書室も設置される。四角形の建物には、既婚者の家族住宅、(3歳以上の子供たちの)寄宿舎、監督官の部屋、総監督の部屋、さらに診療所や訪問者のための宿泊施設がある。四角形の建物の外側には、工場、屠殺場、厩舎、洗濯場、農場施設が続く。

ここに示されたオーウェン共同体は、基本的にはニューラナークをモデルにしたものである。ニューラナークは工場共同体であるが、「一致と協同の村」においては、農業を通して自給自足の経済を目指す点など新しい要素も導入されており、イギリス社会主義の先駆的形態を示すものとなっている。A・L・モートンが指摘するように、オーウェンは「工業と農業の一致を共同体の理想的基盤とみなしていた」のである。¹⁰

このプランは、1820年の『ラナーク州への報告』においてさらに完全なかたちで提出される。共同体の規模については、協働の労働と消費という点から見て300人から2,000人までが農業村落を形成するのに適した数であるとされる。共同体の敷地については、住民一人当たり0.5~1.5エーカーとして150~3,000エーカーを必要とするが、もっとも適切な広さは1,200エーカーである。四角形の建物の内側に設置される共同調理室と共同食堂、学校、病院などの公共建物などについてはこれまでの説明と変わらない。オーウェンは住民の衣服についても言及しており、スコットランド人とローマ人の自然で健康的な衣服観を理想とする見解を示している。四角形の建物の外側に隣接して道路で結ばれる田園部が広がり、さらにその外側に工場が置かれる。共同体の組織運営については、共同体を結合する原理に通じた監督および壮年の構成員から成る委員会が行うことになる。

『ラナーク州への報告』の発表された1820年には、珍しい人物がニューラナークを訪問している。後にイギリスにおける骨相学の権威となるジョージ・クームである。彼は、弟エイブラムとともに、ニューラナークのオーウェンを訪問する。この時のクーム兄弟はオーウェンの歓待を受け、彼から直接工場を案内され、その経営について説明を受ける。ジョージ・クームは、もう一人の弟アンドルー宛ての手紙（1820年11月7日）において、その時の様子を次のように記している。

日曜日の朝食に招待されていたので、出かけてみると、〔オーウェン氏は〕親切にわれわれをもてなしてくれました。その日は一日中彼と行動をともしました。翌日の朝10時に朝食を一緒にとったのち、彼の案内で工場とその運営の仕方を見て回りました。午後2時にお別れをして、エディンバラへと戻ったのですが、まったく気分爽快そのものでした。工場では2,700人が働いており、2,400人がニューラナーク村に、300人がオールドラナークに住んでいます。2歳から10歳までの子供の数は400人であり、2歳になると教育施設の世話を受けるのです。4歳になるまで3人の女性が世話をし、その後は学校に入ります。…子供たちは、音楽に合わせて楽しく遊んだり、学んだりしています。…人生は楽しくなければならぬし、幸福は他者の幸福とともにある、ということです。¹¹

ジョージ・クームは、1828年には主著『人間の構成』(*The Constitution of Man*)を出版して一世を風靡することになる。骨相学は、伝統宗教の衰退によって生じた精神的な隙間にいわば代替宗教として入り込んでいく。クームの目的は、たんに頭蓋骨の形状と性格の対応を提示するだけでなく、それを前提にして社会改革を前進させていくことにあったことに注意すべきである。人間の最終的な目的は、オーウェンと同じように幸福の実現にあり、それは35種類の性格および能力を調和的に発達させることによって実現するとされた。¹² 個人の幸福の実現はやがて社会（共同体）の完成へとつながることになり、骨相学は、社会改革を目指す社会主義と同一の方向に向かうことになる。エイブラムは後に、オーウェン主義を信じて、妻と子供とともにニューラナークに住みこむことになり、やがてオービストン共同体の建設に指導的な役割を果たす。

オーウェンは、人間が生まれたときにすでに備えている先天的な性格と、社会の中で環境によって形成される後天的な性格の2つ部分があると考えた。犯罪者が発生するのは適切な教育が欠落していることが原因であり、幼児のころから利他精神に基づく教育こそ共同体には不可欠であるという視点から、オーウェンは幼児教育施設をニューラナークの中心に位置づけている。教育施設は、オーウェンの共同体の空間的な中心にあるだけではなく、精神的にも中心を占めているのである。個人の性格は生れつきの頭蓋

と脳によって決まるとするクームの骨相学においても、個人の性格判断を基にして、その弱点を自己形成すなわち教育によって補っていくことが求められており、オーウェンの性格形成論とクームの骨相学は教育による個人の改善とそれを通して社会的幸福を実現しようとするという点で結びつくのである。

オーウェンの構想では、共同体が生産する生活必需品は量的にも満ち足るとされており、限られた生産物の分配をめぐる個人の利害が衝突するという事態は想定されていない。したがって、そのために利己主義が蔓延するという事態は終息する。共同体相互の関係も利己主義的・排他的な関係ではなく、利他精神に基づいて問題が処理される。この手法が国家的な規模で展開される時、そこには理想社会（共同体国家）が現れる。『ラナーク州への報告』はオーウェンの理想共同体のマスタープランを示しているが、この報告は一貫して、個人主義に基づく経済システムが結果的に貧困・犯罪・無知を産み出したことを批判しており、旧来のシステムに代わる原理として、「一致と協同」という原理を提出している。¹³

『ラナーク州への報告』に見られる他の提言、たとえば貨幣という人為的な価値基準に代わる労働という自然的価値基準の選択の問題、環境の個人に対する影響がその性格を決定するという主張などはすべて、この個人主義と共同体主義との対比から導かれてくる。オーウェン共同体のもっとも重要な問題は、個人をあらゆる価値の源泉とする伝統的な社会システムが最終的には破綻していくものとみなし、それに代わって人間と人間の連帯に基づく新しいシステムを提起している点である。

この新システムが現実の社会においてうまく機能するためには、構成員の思想的な完全な同意が必要であり、たとえば中世の修道院のような共同体において始めて実践可能となるものである。オーウェン主義に基づく共同体のほとんどすべてが失敗に終わった理由はまさにそこにあるが、その点についてはシェーカー共同体との関連で検討する。オーウェンが例外的に成功した共同体はニューラナークであるが、そこではオーウェン自身が工場経営者として絶対的な「権力」を掌握しており、構成員（この場合には労働者）は否応なくオーウェンの指示に服従する以外の選択肢はなかった。オーウェンは、農業を共同体の基盤産業としながらも、機械による効率的な生産を否定することなく、機械の利点を活かしながら農業との調和を図っていかうとする。そこでは生産労働と消費が協同で行われ、教育を通して構成員の内的な幸福が約束される。オーウェンは、共同体主義を通して、個人主義のもたらす制度的な矛盾を解決しようとしたのである。

4

「一致と協同の村」を基盤とする理想共同体のプランを新天地において実現しようとして、オーウェンは1824年アメリカ合衆国に渡る。それまでに蓄積した財産のほとん

どすべてを投入して、25年にニューハーモニー共同体を発足させる。26年7月4日には、『精神的独立宣言』(Declaration of Mental Independence)を発表して、新時代の幕開きを宣言する。しかし、オーウェンの期待に反して、ニューハーモニーの実験は完全な失敗に終わり、28年にはイギリスに帰国する。

オーウェン共同体の失敗の理由については、いろいろな原因が指摘されているが、その主要な原因のひとつが共同体の結合原理の欠如にあることは間違いがない。あるいは、本来(生物学的に)人間には必要に迫られない限り共同生活を求めようとしなないという側面があるといえるのかもしれない。ニューハーモニー共同体が建設された時代には、アメリカ合衆国において多様な共同体の実験が試みられていた。ここではオーウェン自身も少なからぬ関心を寄せていたシェーカー共同体と比較することにより、オーウェン共同体の提起した問題を改めて考察してみる。

オーウェンの千年王国への熱狂はその時代から離れて登場したのではなく、さまざまな千年王国主義的なグループやセクトの活躍する時代のなかで育まれてきたものと理解することができる。ヤコブ・フッターのフッター派やメノー・シモンズのメノー派などドイツ再洗礼派の衣鉢を継ぐ宗教共同体は、カトリック教会からもプロテスタント側からも迫害を受けて、17世紀以降次々にアメリカ合衆国に新天地を求めて移住する。

アメリカ合衆国において建設された代表的な共同体を挙げると、アン・リーのシェーカー共同体、ヨハネス・ケルピウスの「荒野の女性の幕屋」(Tabernacle of the Woman in the Wilderness)、コンラッド・バイセルのエフラタ共同体(Ephrata)、ウィリアム・ミラーのミラー派(Millerites)、ジョージ・ラップのハーモニー共同体(Harmony Society)、ウィリアム・キールのベセル共同体(Beth El)、クリスチャン・メッツのアマナ共同体(Amana, the Community of True-Inspiration)、ジョン・ノイズのオナイダ共同体(Oneida)、ジョゼフ・スミスのモルモン教(Mormonism)などがある。これらの共同体は、ほとんどの場合千年王国の到来を軸に教義が構築されており、宗教的熱狂は共同体の結合原理として機能していた。

イギリス本国においても特にフランス革命を前後する時代には、千年王国的な熱狂が再現された。「神からの通信」による預言で多くの信奉者を集めたジョアナ・サウスコット、イギリスのユダヤ人を集めてイエルサレムに帰還して千年王国を建設しようとして精神病院に収容されたりチャード・ブラザーズなども時代の宗教的熱狂がどのようなものであったかを物語っている。酸素の研究によって著名なジョゼフ・プリーストリーの神学思想も唯物論と融合する独自の千年王国論を展開していた。¹⁴

オーウェンはハーモニー共同体を譲りうけてニューハーモニー共同体の実験を試みていることから、当時の千年王国主義的な共同体との繋がりは明らかであるが、共同体の制度設計という視点からはシェーカー共同体との関係がもっとも深いと考えられる。

オーウェンの千年王国的な論調は 1817 年に頂点を迎えるが、この頃に彼はアメリカ合衆国の代表的な宗教共同体であるシェーカーに関する小冊子を出版する。この『シェーカー教徒と呼ばれる宗教団体の素描』(*A Brief Sketch of the Religious Society of People called Shakers*) は、フィラデルフィアのクエーカー教徒 W・S・ウォーダーがオーウェンに送ったシェーカー共同体に関する短い紹介であり、『自叙伝』(I a) の付録 K として収録されている。¹⁵ ウォーダーの「素描」は、当時のシェーカー共同体を知る貴重な資料であるばかりでなく、今日読んでもシェーカーに関する簡潔で要領をえた紹介となっている。

オーウェンは『自叙伝』において、「私有財産をもたない」シェーカー共同体が短期間に「健康と慰安とに必要なすべてのもの」を供給することができ、道徳的にも「個人的な競争制度」の下で生きている人々よりはるかに優れていると賞賛している。¹⁶ オーウェンは、シェーカーの宗教的熱狂の部分は受け入れなかったが、その新しい共同体の活動が産業革命のために俗悪化した社会を改善する有効な手段となることについては評価していたのである。

千年王国主義は、シェーカーが登場した当初からその教義の中核をなしていた。18 世紀初頭に「フランスの預言者」という千年王国主義を標榜するグループがイギリスに上陸し、1747 年にマンチェスターのクエーカーであるジェームズ・ウォードリーとその妻ジェインのグループがその影響を受けて新しい宗教セクトを創設する。¹⁷ 後にシェーカーと呼ばれるこのグループの思想的な核心には、千年王国が間近に迫っているという認識があった。シェーカーという名称は、本来「震えるクエーカー」という言葉から来ていることから分かるように、クエーカーの分派を表す形容詞に由来する。クエーカーとシェーカーとは、宗教的熱狂の価値を認めて内なる光を求める点など共通する点も多い。「フランスの預言者」は、メソヂイスト派と同じように、モラヴィア派の影響を受けている。モラヴィア派はまたニューラナーク紡績工場の創業者デイルにも影響を及ぼしており、オーウェンとの関係が注目される。¹⁸

1758 年頃、アン・リーという 22 歳の女性に加わり、1770 年頃にはグループの中心的存在となる。踊ったり喚いたり冒瀆的な言葉を吐いたりしたために投獄され、獄中において千年王国がすでに到来したという啓示を受ける。この時期を境にシェーカー運動の霊的指導者はアン・リーとなる。シェーカーは歴史的なキリスト(イエス)を「キリスト霊」を最初に受けた神の男性原理とみなしていた。アン・リーは「キリスト霊」を受けた神の女性原理であり、「キリスト霊」が彼女に降りた時点が、聖書の約束するキリストの再臨と解釈されたのである。¹⁹ シェーカーは正式には千年王国教会、あるいは「キリストの再臨を信ずる者の合同協会」とも呼ばれるが、この場合の再臨したキリストとはアン・リーに降りたキリスト霊のことである。千年王国は通常は未来に設定され

ることが多いが、シェーカーの場合は、アン・リーの覚醒によってキリストの再臨が起り、千年王国はすでに始まっていると考える点に特徴がある。シェーカー共同体は、完全な共同体の生活を通して、漸進的にゆっくりと千年王国を完成していくことが生きる証となる。

シェーカー共同体も、最初から完成した形をなしていたというわけではない。1774年にアメリカに渡り、最初の共同体としてニスケユナ共同体を建設したのち、レバノン共同体、ハンコック共同体の建設が続く。1787年にニューレバノン（後のマウント・レバノン）共同体が建設され、ここが全米のシェーカー共同体の本部となる。ジョゼフ・ミーチャムとルーシー・ライトが指導者となり、共同体組織も整備されてさらに新しい共同体が建設されていく。シェーカーは、この地上にありながら天上的な世界に参入する、すなわちこの生身の身体のみで千年王国を実現する生活を目指したのである。シェーカー教徒は、すでに天上にあるという意識をもって共同体を構築していた。共同による生産活動、生産物の公平な分配、清潔と規則に基づく日課など、シェーカー共同体の生活そのものが「復活」した神の国であるといえる。共同体の中心は「ミーティングハウス」と呼ばれる集会場であり、共同体の霊的中心となる。

1823年には、シェーカー教徒は全体で4,000人ほどになる。オーウェンがシェーカー共同体を訪問するのは、ちょうどこの頃である。彼は新しく建設するニューハーモニー共同体に向かう途中、1824年11月16日にニスケユナ（ウォーターヴリット）の共同体を訪問している。そのさいにシェーカーは、ニューハーモニー共同体の構成員の宗教的な信念がまとまってはいないことを聞いて、そのような共同体が調和して運営されるはずがないとオーウェンを説得しようとしたといわれる。²⁰

シェーカー共同体は、通常の家系の父親に相当するエルダーと母親に相当するエルダレスのもとに生活する「ファミリー」（30人から150人ほどの規模）が2つから6つほど集って構成される。複数のファミリーあるいは共同体を統括するのがミニスターとトラスティーであり、ミニスターは霊的な指導者、トラスティーは共同体の生産・消費の事務部門を統括する。シェーカー全体を統括するのは、マウント・レバノン共同体のリード・ミニストリーであり、ファミリーの場合と同様にエルダーとエルダレスによる指導体制をとっていた。シェーカーの神概念は男女両性的な要素をもっており、共同体の運営もまたつねに男女一組の指導によって行われていたのである。

シェーカーは、私有財産を禁じており、すべての財産は共有とされていた。結婚は私有財産の発生する根源であり、結婚によって個人は女性と財産の所有を意識するようになると理解されていた。重要な点は、私有財産を否定すること自体が目的ではなく、それを共同体が霊的に一体化するための手段とみなしているという点である。²¹ 私有財産をもったままでは共同体の霊的な一体化はできないというのは、原始キリスト教の時代

から説かれていた考え方である。結婚という制度と私有財産への根本的な問いかけはオーウェンにも見られるものであるが、共同体の霊的な一体化という点において両者は決定的に異なっていた。

オーウェン共同体は千年王国主義を目指しているとはいえ本質的には世俗共同体であり、宗教共同体としてのシェーカーとは異なる。シェーカー共同体は、むしろ一種の〈教会〉あるいは〈原野に展開した世俗的修道院〉と考えるほうが適切である。オーウェンのニューハーモニー共同体が数年で崩壊せざるをえなかったのに対して、シェーカー共同体が19世紀半ばに6,000人を超える発展を遂げても結束の強さを誇っていた原因のひとつは、両者の結合原理の質的な相違に求めることができる。

5

晩年を迎えて死を間近に感じていたオーウェンは自分の生涯を振り返って、自叙伝を執筆する。1857年に『自叙伝』第1巻が出版されるが、彼の生涯を回想する基点は、いうまでもなく性格形成論を基盤にした社会改革であり、オーウェンの千年王国が自由と幸福の実現した現実社会であることはすでに指摘した通りである。『自叙伝』には実は、社会改革と並んで、心霊主義というもうひとつの重要な視点がある。

ニューラナーク時代のオーウェンは、キリスト教を含む個別的な宗教を否定し、「合理宗教」こそ「普遍的な」宗教であると主張していた。それは制度化された宗教ではなく、個々の人間が適切な環境のもとで自発的に愛と利他精神に基づく共同体を形成する原理となるものであった。現実にはオーウェンの理想はなかなか実現することはなく、千年王国の夢は、生涯の終わりになって心霊主義に接合されることになる。オーウェンは、いうまでもなく興味本位で心霊主義を捉えていたのではなく、心霊主義が千年王国の到来を促進する手段であると位置付けていた。

1852年10月にアメリカの霊媒ハイデン夫人がロンドンを訪れ、1年ほどの間に頻繁に降霊会を開催する。参加者はアルファベット盤に手を置いて、ラップ（叩音）に従って文字を読み取っていく。この交信は死霊からのメッセージと解釈されて、多くの人々が心霊主義を余興として、一部の人は新しい「宗教」あるいは代替宗教として受け入れるようになる。1855年にはヴィクトリア時代の最大の霊媒といわれるダニエル・ホームもアメリカからイギリスそしてヨーロッパに渡り、心霊主義の流行をさらに促進させる。ハイデン夫人の影響を受けたオーウェンは1853年に心霊主義に帰依し、さらにホームの降霊会にも出席するようになるのである。

オーウェンは『自叙伝』において、心霊の世界について次のように述べている。心霊は、「生きている時のように視覚に訴えられぬ場合を除き」、この地上において知人と「霊交しあっている」。そして、親交のあった故セント公の心霊がオーウェンを訪れるた

びに、彼は「いうにいわれぬ喜びと幸福を感じる」と同時に、他界した友人たちとの霊交が人類全体の利益になると語っている。「新しい心霊のあらわれ」こそ、オーウェンが長年夢見てきた理想社会の実現のための基礎となるものであり、「人類の歴史におけるあらゆる変革のうちの最大なるものを用意」しているとさえ主張しているのである。²²

オーウェンと心霊主義との関係については、老齢のための判断力の衰退によるものであり、オーウェンを評価するさいには除外すべきである、少なくともまともに評価すべき対象ではないという見方も依然として残っている。しかし、心霊主義はオーウェン自身にとっても重要な意味をもっていたと同時に、オーウェン以後のオーウェン主義者にとって強い影響力が働いていたことは事実として受けとめなければならない。

心霊主義は、キリスト教の衰退と自然科学の発展のかけで、人々の精神的な枯渇状態を潤す代替宗教として登場した。ただし、代替宗教とはいっても、そこには超自然に人間が頭を垂れるという昔日の宗教の面影はもはやない。伝統宗教では人間は神や神的存在など超自然を人間の上位に位置付けていたが、19世紀の代替宗教においてはこの人間と超自然との関係が逆転する。人間一人ひとりが、制度化された宗教の強制から解放されて、それぞれの「宗教」を自己の内面の世界において展開する。その端的な現れが心霊主義であり、そのような位置付けがなされるからこそ、心霊主義の延長上に精神分析や深層心理学が登場することができたのである。

したがって、19世紀の心霊主義の発端とされる1948年にニューヨーク州のハイズヴィル事件は、社会精神史的な視点から見れば一つの通過点にすぎないことが理解される。この事件から10年ほど前にシェーカー共同体でも、同じような現象が認められている。1837年8月16日にニスクユナ共同体において、集会の踊りの最中に10歳から14歳の少女たちが突然意識を失って倒れ、回復したあとで天使と語り合ったり、天上の世界へ旅をしたというような不思議な話をするようになる。やがてこの現象は大人たちにまで広がり、マザー・アンの霊との交信をする「道具」(instrument、心霊主義の霊媒に相応する)が共同体に登場する。彼女たちは突然不思議な力に捉えられ、身を震わせ、霊の語ったことを話したのち、死んだようになって床に倒れこむ。信者たちに語りかける霊は、最初はイエスとマザー・アンの霊であったが、やがてファーザー・ジョゼフ、マザー・ルーシーなどシェーカー共同体の亡くなった指導者たちの霊も加わるようになる。²³これは現象そのものとしては、心霊主義とほとんど変わらないように見える。

嘲笑と非難、冷笑と侮蔑、これが現代における心霊主義への一般的な態度であろう。死者の霊との交信などあるはずがなく、霊媒の心霊現象はそのほとんどが(あるいは例外なく)トリックを使った不正行為によって演じられている——この見方はそれ自体

では間違いはない。心霊主義への懐疑的な態度は、心霊主義がもっとも流行していた1860年代から70年代にかけても常識的な見方であったと思われる。しかし、心霊主義には、それが社会に受け入れられ、おびただしい人々によって真正と判定され、当時の代表的な科学者たちの調査対象となったという歴史的な事実があり、その社会精神的な意義は、心霊主義を真正面から否定するところからは見えてこないのである。心霊主義は実際にどのような精神運動であったのか、この問題を理解するためには、その背景となっている歴史の中に心霊主義をおき直してみる必要がある。

心霊主義という用語そのものが与える印象には、今では何か暗く病的で陰鬱なイメージがともなっているが、100年ほど前の欧米ではいささか事情が異なっていたことにも留意しておくべきである。超常現象の背後に不正と欺瞞がつねに存在していたことは変わらないが、19世紀後半において心霊主義は、現代のイメージとは逆に、建設的で明るい社会改革運動という側面も備えていた。心霊主義は、心身ともに健康な個人を完成する手段であるだけでなく、「改善、進歩、人間性」を標榜して社会の完成をも目指す運動として理解されていたのである。A・オーウェンは『暗い部屋』において、次のように述べている。

心霊主義は、それを批判する識者たちがいうように病的で内省的な現象とはほど遠いものであった。「英国心霊主義者協会」の設立趣意書が示しているように、心霊主義者たちは「われわれの未来への最良の準備は、エネルギーと活動性に満ちた生活であり、この世で達成できる最高の身体的・道徳的・知的水準に応じて生きる」ことであると信じていた。彼らは結果として、身体と精神を浄化するべく考案された修練法に見られるように、個人と社会の完成という理想を追求していた。…心霊主義者は人生の荒波から身を引くどころか、出版と講演によって、改善、進歩、人間性の名のもとに戦闘へと参加するよう人々を説得していたのである。²⁴

現代において理解されている心霊主義は、こうした意味内容とはほとんど対極にあるものといえる。心霊主義の系譜は単独で展開したのではなく、メスメリズム・催眠術・骨相学などともに、19世紀の産業主義と並行して進んだ物質主義的な風潮のなかで登場した代替宗教として捉えなおすことができる。この代替宗教という位置付けも、超自然的な存在を前提とする伝統的な宗教の復活と捉えるのではなく、逆に合理主義の視点から超自然を捉えなおしたもの、あるいは捉えなおそうとしたものという見方が必要となる。進化論を唱えたA・R・ウォレスも若い頃オーウェンに傾倒し、後には土地国有化運動の指導者としても活躍しており、同時に心霊主義者の熱心な唱道者でもあった。オーウェンだけでなく、彼の多くの後継者たちにおいても、心霊主義と社会主義が同居

していたという事実に眼を向ける必要がある。社会主義は、生産手段・土地・資本などを個人的所有から共同体の所有（社会的所有）へ移し、生産物を平等に分配するという制度的な変革に留まるだけではない。経済システムの変革だけでなく、利己主義から利他主義への意識改革など人間の道徳的な変容をテーマとするイデオロギーと理解すべきである。

6

オーウェンが心霊主義に傾倒していたという事実だけに注目すると、「死者の霊との交信」という現象に惑わされて、その本質を見失ってしまう可能性がある。アメリカ合衆国における心霊主義の展開においても、当初から社会主義あるいは社会改革と密接に結びついていた。19世紀のアメリカ合衆国は、数百もの社会主義的な実験共同体が登場する時代でもあり、心霊主義はこうした共同体の千年王国への期待と歩調を合わせて進行するのである。フランク・ポドモアは、19世紀中葉のアメリカ合衆国において心霊主義が発生し定着した背景として、社会的に不安定な状況と人々の心理的な不安を挙げ、さらに新興宗教や新しい信念をむやみに拒否する風潮がなかった点を挙げている。「現在の社会状態の欠陥への不満」があるかぎり、人々の千年王国への期待は存続するといえる。²⁵ 千年王国運動は、宗教的な熱狂を原動力として共同体そのものを理想共同体として建設しようとする。社会主義運動もまた、資本主義的な矛盾を制度的な改革によって克服することにより理想共同体を志向する。19世紀において千年王国運動と社会主義は、相互に微妙な影響を与えながら展開していくのである。

社会主義という課題は、現在では主として政治学あるいは経済学の研究対象として位置付けられることが多いが、オーウェンの共同体主義を一瞥するだけでも、本来の社会主義はきわめて宗教的な色彩の強いものであり、たんに政治経済の視点からだけでは分析できないことが理解される。社会主義の観念には、社会精神史的な文脈を抜きにしては正確に捉えられない側面がある。アーサー・ベスター・ジュニアはオーウェン主義について、「倫理的、教育的、心理的な原理が彼の心を占めており、『新道徳世界』あるいは『理性的な社会システム』という用語は経済的な内容を含むものではない。彼の共同体はそうした道徳的・理性的な社会を現実化するよう設計されており、経済組織はその仕組みの単なる一部であり、手段ではあっても、けっして目的ではない」と指摘している。²⁶

オーウェンの活動からおよそ半世紀後にイギリスを代表する社会主義団体としてのフェビアン協会が結成される。1884年に結成された社会民主連盟はマルクス主義的な色彩が強く、内部分裂を繰り返して衰退していったが、同年にイギリスの知識人層を中心として結成されたフェビアン協会は、土地や大企業の漸進的国有化を唱えてイギリス

社会主義を代表する団体となり、現在まで命脈を保っている。このフェビアン協会の成立にあたって心霊主義者が重要な役割を果たしていたことは、オーウェン以降のイギリス社会主義には特殊な精神的傾向があることを窺わせる。

フェビアン協会というと G・B・ショーやシドニー・ウェップなどと結びつけて想起される場合が多いが、その創設に重要な役割を果たしたのはポドモアやエドワード・ピーズであり、フェビアン協会という名称を選んだのもポドモアである。ポドモアは、英国心霊主義者協会に参加しているほかに、イギリスにおける心霊主義研究の代表的機関であるイギリス心霊研究協会の創設当時の会員であり、20年近くも会員として心霊主義の研究を続けていた。1902年の『現代の心霊主義』(*Modern Spiritualism: A History and a Criticism*) は心霊主義研究の古典とみなされている労作であり、1906年の『オーウェン伝』(*Robert Owen: A Biography*) はオーウェンの伝記として今なおその価値を失ってはいない。フェビアン協会は、イギリス民主主義を堅持しながら、自由放任の経済から土地と生産手段の公有化を目指し、資本主義の矛盾を暴力革命によることなく漸進的に改革していくことを目標にしており、イギリス社会主義を象徴する組織であるが、その背景には、世俗的千年王国と心霊主義を標榜するオーウェンの精神が受け継がれていることは否定することができない。イギリス社会主義のこうした性質は、ポドモアの「心霊主義と社会主義とは相性がよい」という言葉に的確に表現されているように思われる。²⁷

注

- 1 Robert Owen, *The Life of Robert Owen written by Himself with Selections from his Writings and Correspondence*, vol.1, Effingham Wilson, 1857, p.162. 『オーエン自叙伝』(五島茂訳、岩波文庫、1974) 286頁。
- 2 Ian Donnachie and George Hewitt, *Historic New Lanark: The Dale and Owen Industrial Community since 1785*, Edinburgh University Press, 1993, pp.83-4.
- 3 Gregory Claeys, ed., *Robert Owen: A New View of Society and other Writings*, Penguin Books, 1991, pp.109, 115, 122.
- 4 *Ibid.*, pp.118-20.
- 5 『ラナーク州への報告』において、アダム・ヴァイスハウプトの創設したフリーメイソン系結社イルミナティ (Illuminati) への言及がなされ、急進的な社会改革の失敗例として位置づけられている。*Ibid.*, p.278.
- 6 Owen, 1857, p.159. 『オーエン自叙伝』 280頁。この「宇宙の偉大な創造的力」は伝統的な神の啓蒙主義的な表現であり、フリーメイソンによる「宇宙の偉大な建築師」という表現が想起される。
- 7 Claeys, 1991, p.199.
- 8 Owen, 1857, p.161. 『オーエン自叙伝』 284頁。

- 9 Claeys, 1991, p.221. W・H・オリヴァーは、論文「1817年のオーウェン：千年王国主義者としての瞬間」(1971)において、オーウェンの千年王国思想を簡潔にまとめている。W.H. Oliver, "Owen in 1817: The Millennialist Moment," in Sidney Pollard and John Salt, eds., *Robert Owen: The Prophet of the Poor*, Mcmillan, 1971. この論文集の抄訳として『貧民の予言者』(根本久雄・畠山次郎訳、青弓社、1985)がある。オリヴァーの論文(1971)は、W.H. Oliver, *Prophets and Millennialists: The Uses of Biblical Prophecy in England from the 1790s to 1840s*, Oxford University Press, 1978の第8章に再録されている。
- 10 A.L. Morton, *The Life and Ideas of Robert Owen*, Lawrence & Wishart, 1962, p.29.
- 11 Charles Gibbon, *The Life of George Combe, Author of "The Constitution of Man,"* I, Macmillan, London, 1878, pp.131-2.
- 12 骨相学における器官と機能は、フランツ・ガルの場合は27の機能、ヨーハン・シュプルツハイムの場合は33の機能、クームの場合は35の機能というように、次第に新しい機能が加わっていく。クームは『人間の構成』第4版(1836年)において、35の性格を分類している。George Combe, *The Constitution of Man*, 4th edn., Edinburgh, 1836, in Roger Cooter, ed., *Phrenology in Europe and America*, 5, Routledge/ Thoemmes Press, London, 2001, p.14.
- 13 Claeys, 1991, p.276.
- 14 18世紀後半の千年王国運動については、J.F.C. Harrison, *The Second Coming: Popular Millenarianism 1780-1850*, Routledge & Kegan Paul, 1979; Clarke Garrett, *Respectable Folly: Millenarians and French Revolution in France and England*, The Johns Hopkins University Press, 1975などを参照。また、W.H. オリヴァーは、オーウェンがマンチェスター時代にプリーストリーの進歩的千年王国論を知る機会があった可能性について指摘している。W.H. Oliver, 1971, p.182; W.H. Oliver, 1978, p.192を参照。
- 15 Robert Owen, *A Supplementary Appendix to the First Volume of The Life of Robert Owen, Containing a Series of Reports, Addresses, Memorials, and other Documents, Referred to in that Volume*, vol.1.A, Effingham Wilson, 1858, pp.147-54.
- 16 Robert Owen, 1857, pp.242-3. 『オーエン自叙伝』422頁。
- 17 Henri Desroche, *The American Shakers: From Neo-Christianity to Presocialism*, trans. and ed., J.K. Savacool, University of Massachusetts Press, 1971, pp.17, 23.
- 18 *Ibid.*, pp.268-9.
- 19 *Ibid.*, pp.175-6.
- 20 *Ibid.*, p.272.
- 21 *Ibid.*, p.194.
- 22 Owen, 1857, pp.194, 229. 『オーエン自叙伝』338、399頁。フランク・ポドモアは『オーウェン伝』において、オーウェンが参加した降霊会の様子について詳細に記録している。Cf. Frank Podmore, *Robert Owen: A Biography*, Allen and Unwin, 1906, pp.605-6.
- 23 Desroche, 1971, p.218.
- 24 Alex Owen, *The Darkened Room: Women, Power, and Spiritualism in Late Nineteenth Century England*, Virago Press, London, 1989, pp.26-7.
- 25 Frank Podmore, *Modern Spiritualism: A History and a Criticism*, vol.2, Methuen, 1902; Routledge, 2000, p.350.

- 26 Arthur E. Bestor, Jr., *Backwoods Utopias: The Sectarian and Owenite Phases of Communitarian Socialism in America 1663-1829*, University of Pennsylvania Press, 1950, pp.77-8.
- 27 Podmore, 1902, vol.1, p.209.